

## プレゼン修行拾遺録【第2回】 バイリンガル・プレゼンテーション

轟 眞市

物質・材料研究機構 光材料センター\*

Shin-ichi TODOROKI

こんな時、どのようなプレゼンテーションを準備すべきか？

聴衆のほとんどは日本人なのだが、海外から重要なゲストが出席しており、直前に彼らは英語で発表する(逐語通訳付き)。

よく見掛けるのは、和文上映資料に英訳を「ふりがな」の様に書き加えて、日本語で発表するケースだ。発表者にとってはお手軽だが、聴衆にとっては上映資料がごちゃごちゃして見にくくなる。外国人ならなおさらだ。それならば、と、ゲストの顔を立てて英語で発表すると、ついてこれない日本人が出てくる。

筆者は先日、この様な条件での講演をこなしてきた[1]。材料科学を離れたアウェイの場で、日本語で話したにも関わらず、双方に満足してもらえた手応えを得た。そのノウハウをここにまとめておく。

### プレゼンに王道は無い

講演時間内にできることは限られている。普通にプレゼンテーションを行うだけでも、完璧を期するのは難しいのに、内容を削らずに二ヶ国語でメッセージを伝えるだけの余裕は無い。ならば、準備に時間を掛けるしかない。上映資料を日英二種類準備することにした。

発表は日本語で行うのだから、英語版は見るだけで話が追える様に作りこむ必要がある。独自の英語版を作るだけ時間は無いので、日本語版を単純に英訳するしかない。持てるノウハウのすべてを採り入れて、見るだけで理解できる日本語版[1]を完成さ

せた。「結論は3行で」、「5行ルール」、「文章より絵を」、「等々。その詳細は既に別の連載記事[2]にまとめてある。

特に力を入れたのはイラストである。発表の中で言及する三者(研究者、図書館員、システム開発者)の関係を端的に把握できる様に、イラストを散りばめた(図1参照)。この三者の関係を文章で説明しようとする、と、たちまち「5行ルール」(上映資料1枚に書く文章の上限)に反してしまう。イラストの力を借りるべく、研究者達がまたがる「馬」と図書館員がぶら下げている「ニンジン」、そしてその背後に控えるシステム開発者の姿で、彼らの関係を暗示した。

続いて英訳[3]に取り組んだのだが、思いのほか苦労した。同じスペースに盛りこめる内容は、日本語の方が漢字が使える分遙かに大きい。しかし、手塩にかけたイラストが意味を補完してくれる。類語辞典を引きまくって、コンパクトな英文を捻り出し、埋めていった。

### 杉田敏氏から学んだこと

筆者が大学生であった頃から、NHK ラジオ「やさしいビジネス英語」で講師を担当していた杉田敏氏の本業はPR業であり、氏のプレゼンテーション技術に関する著作からは、さまざまなことを吸収した。その中でも、「説得の三つの要素は『エトス』『パトス』『ロゴス』」[4]は、私の身に付けたプレゼン技術の根底をなすものである。もともとは、ギリシャの哲学者アリストテレスが唱えたことで、今回のプレゼンテーションの例に当てはめて読み替えると、エトスは前評判や期待、パトスは熱意、ロゴスは論理となる。

\*〒305-0044 茨城県つくば市並木1-1  
fax 029-854-9060  
URL: [http://www.geocities.jp/tokyo\\_1406/](http://www.geocities.jp/tokyo_1406/)

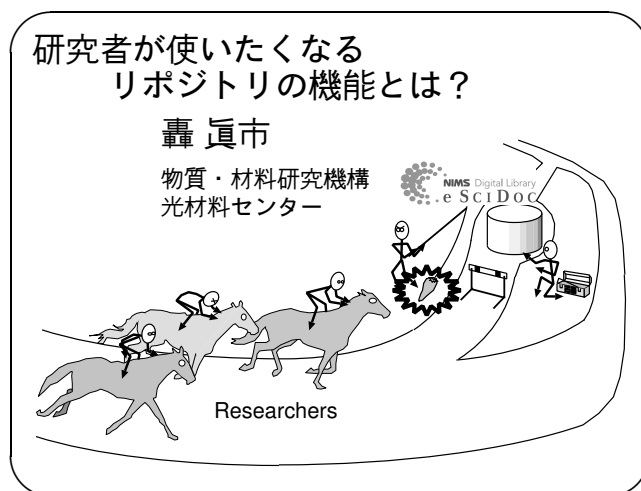


図 1: 講演 [1] で用いた上映資料の 1 枚目。前回の連載で紹介したベクトルマンを登場させた。

ロゴスは、綿密に準備した上映資料が支えてくれる。しかし、図書館業界では無名な私のエトスは零である。しかしセッション開始直前、プロジェクトのテストとして上映したイラスト付きタイトル(図 1)が、私のエトスを高めてくれた。

This is a very nice slide!

講師の一人が発した言葉が私の耳に届いた。こちらを振り返った彼に、私は親指を立てたサインで応えた。

彼らの講演が終わり、私の番になった。日英 2 種類の上映資料を併映しつつ日本語で話す私は、彼らの反応を確認するだけの余裕は無かったのだが、後から好意的なコメントをもらった。

「同僚にこの上映資料を回覧する。」

「欧州に来たら立ち寄ってくれ。歓迎する。」

日本人のひとりからは、意外なコメントを頂いた。

「威圧的でないことが新鮮だ」

私の様な職に就いている人間のエトスに、「威圧的」という要素がある、ということだ。それを、私のパトスで塗り替えることができた、と解釈した。

杉田氏曰く、プレゼンテーションの目的は人を動かすこと。この講演がきっかけとなって、執筆や講

演の依頼を受けることとなったのだから、合格点には達しているのだろう。その日のうちに機関リポジトリで公開した上映資料も、その後 30 件近くダウンロードされたことが確認できた。

最後に、この講演を企画し、サポートして頂いた NIMS 科学情報室の面々に感謝します。

#### [参考文献]

- [1] 轟 眞市：“研究者が使いたくなるリポジトリの機能とは？”，NIMS-DL フォーラム「デジタルライブラリーのその先に見えるもの」/ 学術情報オープンサミット(フォーラム 27-18), 横浜市 (2008).
- [2] 轟 眞市：“セレンディピティを高めるプレゼンテーション技術(連載全 6 回)”，工業材料, 55, 8~ 翌 3 月号 (2007~2008).
- [3] S. Todoroki: “How we pave the way of NIMS eSciDoc? –a user’s opinion”, The 2008 Scientific Information Open Summit: Forum 27-18, Yokohama, JAPAN (2008).
- [4] 杉田 敏：“人を動かす！話す技術”，PHP 研究所 (2002). ISBN 4-569-62287-9 (PHP 新書 212).

上記の筆者による文献はすべてセルフアーカイビングされています。タイトルで検索してみてください。